

4 . 文明化論再考

- グローバリゼーションにおけるエリアスとスポーツ -

坂 なつこ

はじめに

近年、ノルベルト・エリアス(Norbert Elias)の名前を冠した研究が出版されるようになり(奥村隆『エリアス・暴力への問い』[勁草書房、2001年]、大平章[編著]『エリアスと21世紀』[成文堂、2003年])、日本でも本格的なエリアス研究が見られるようになったといえる。これまで日本においては、エリアスの主要著作のほとんどが邦訳されていること、イギリス、オランダ、ドイツを中心にエリアス学派(Eliasian)が形成されていることを考えれば、いわゆるプロパーといえる研究は少なかったからである¹⁾。

他方で、エリアスに関する言及は、「暴力」あるいは「文明化」といったキーワードとともに用いられることが多く、それらと比較するとエリアスの社会的な分析枠組みは、あまり重視されてこなかったといえる。本稿では、そのメカニズムとエリアスの「文明化論」との関連をスポーツに焦点をあてることで浮き彫りにすることを試みる。なぜなら、第一に、エリアスがスポーツを取り上げたのは偶然ではなく、スポーツが近代社会における重要な文化現象としてエリアスの文明化論から導かれるからであり、第二にそれは、従来いわれるような「反・暴力」論としてよりは、文明化論にあらわれる彼の「コスモポリタニズム」との関係で捉えることができるからである。

それらは、スポーツにおけるグローバリゼーション過程を読み解く際の手がかりを示唆しうられる。現在、「大きな物語の終焉」といわれた後に、しかしながらそれに代わる社会を捉える大きな枠組みがなかなか見いだせ

ないまま、グローバリゼーションといういつそう複雑で変化の激しい時代を迎えていることが認識される。そのなかで、近年のエリアスに対する関心には、なんらかの現代社会の分析視角を示しうるという期待が込められているように思われる。それは「9・11」以降再び取りざたされているような「文明」対「野蛮」という単純な図式においてではなく、「人類」という枠組みにおいて「人間の運命」を捉えるエリアスの包括的に社会と諸個人を捉えようとする理論への期待であると考えられる。

1 . スポーツとエリアス

スポーツ社会学におけるエリアス研究は、日本においては、他の分野に先んじて受容されてきたといえる。『ノルベルト・エリアスと21世紀』の文献表を活用させてもらえば、初期の頃の研究論文の多くはスポーツ社会学の分野におけるものであることが分かる²⁾。エリアスが「スポーツに関する知識は社会に関する知識である」と述べているように、スポーツを社会構造とのかかわりで歴史的、関係論的に捉えるスポーツ論が、従来「無視されがちであった社会学の分野」にその重要性を知らしめた役割と関連しているであろう³⁾。エリアスは、E. ダニング(Dunning)との共著である『スポーツと文明化』(原題は『興奮の探求』)において、「比較的暴力をともしなわれないような肉体的な戦闘形態としてのスポーツ」という娯楽の形式が、イギリス社会の議会制民主主義の形成とそのエートスの普及の中で出現してくる過程を描いた。そこで、エリアスは、『文明化の過程』で示した西洋社会の発展の指標といえる「暴力

の閾値」の変化、「自己抑制」という内面化の構造によりスポーツを読み解いたといえる。それによってエリアスは、ダニングがいうようにアカデミーにおいて広く認知されるようになった。しかしながらこのことは、皮肉にもいっそう「身体と暴力に関する社会史的研究」という評価を決定的にすることとなったと思われる⁴⁾。エリアスがスポーツ研究で示した「社会一般の権力構造」を明確にするという試みは、「文明化」や「暴力」といったキーワードほどは注目されなかったといえる。

エリアスが、肉体的暴力への嫌悪が次第に増していく社会において、それ以前の社会において親しんできた「より素朴で、自発的な行動様式に結びついている楽しい満足」を経験できる社会的な場がほとんど見られなくなり、スポーツはそれが経験できる「社会的に許容された肉体的暴力の表現のための飛び地」であると述べるとき、その焦点は暴力の形態の変化にあるように思われる⁵⁾。

しかしながら、そういったエリアスのスポーツの研究は、彼の「文明化の過程」という考え方との連繋を理解することなしには、その主題を十分に汲み取ることはできないと思われる。多木浩二の指摘に典型的に見られるように、エリアスのスポーツ研究は、単純な「肉体的暴力の抑制の発露」に過ぎなく、近代スポーツの発生においては有効であるが、現代スポーツの分析にとってはその可能性は見られないという結論に陥るのである⁶⁾。エリアスが、暴力衝動との関係において、スポーツを「模倣的な戦い」としてとらえたことは重要な点である。しかし、そのうえで、「文明化の過程」において社会構造と諸個人の情感の変化をとらえ、それらが織り成す社会を「フィギュレーション(Figuration)」として捉えるエリアスのフレームは、複雑化し重層化する現代社会とスポーツとの関連を捉える、重要な枠組みを提示しうると思われる。

エリアスは、「暴力に対する嫌悪の閾値」の変化は、諸個人の相互依存の網の目のよりいっそうの進展のもとであらわれるとする。すなわち、「人々の行動を規則的に統制する手段の漸進的強化、それに対応する良心の形成、生活のあらゆる領域をさらに細かく規制する規則の習得は相互関係にある人々により多くの安全と安定性を確保してくれる」、そのような社会が形成される中で、人々が「楽しい緊張の興奮」を得ることができる。スポーツがその問題の解決策であったとする⁷⁾。しかし、それだけではなく、エリアスの関心は、「スポーツ」という新しい娯楽の形式が(それ以前の身体文化とは異なった特徴を明らかに持っている)、なぜ19世紀のイギリスにおいて生じたのか、さらに、なぜそのような新しい娯楽がその時期世界に広がっていったのか、という問いを提示する。言い換えれば、そのような娯楽を生み出した社会とはどのようなものか、さらにそのような娯楽を必要とする社会が同時期に世界にみられることの意味は何かという問題設定であり、そこにおける社会構造の変化のメカニズムがエリアスのスポーツ研究における一つの柱となっているのである。

さて、エリアスは「『スポーツ』と呼ばれるイギリス式娯楽」が世界的な普及をみるのは、「この種の娯楽は明らかにこの時期に多くの国々で必要とされた余暇の欲求に一致していた」からであるとする⁸⁾。そして、「『スポーツ』という肉体の行使が重要な役割を果たす娯楽の特殊な形態」は、イギリスで最初に発展し、それが世界中に広がっていくプロセスを「スポーツ化(sportization)」とあらわす⁹⁾。しかしながら、エリアスはこの議論について、特に現代スポーツの状況に分析を進めることはなかった。エリアスの議論を引き継いで、J. マグワイア(Maguire)は、この「スポーツ化」という概念をスポーツのグローバル化にあてはめて論じている¹⁰⁾。スポーツをグローバリ

ゼーションの枠組みにおいて捉えているマグワイアの議論は、エリアス研究およびスポーツ社会学の双方において重要な位置を占めていると思われる。以下では、マグワイアのグローバル・スポーツ論について概観する。

2. マグワイアのグローバル・スポーツ

マグワイアは、スポーツを捉える際に「フィギュレーション」としてあらわれる、人々を拘束し、かつ可能にする複合的な相互依存のネットワークを重視する¹¹⁾。さらに、フィギュレーションは現前する変動としてのみ捉えるのではなく、過去の構造化されたプロセスから出現したものであり、そのためある社会において現在みられる現象も、その社会を取り巻く諸関係を歴史的に捉え、その結果あらわれるものと捉えるべきであるとする。例えばマグワイアは、1980年代以降のイギリスにおけるアメリカンフットボールの普及過程について、アメリカンフットボールにおける「政治経済」だけではなく、イギリスにおける文化や人々の振る舞いの全体にどのようなインパクトを与えたのかを分析するためには、英米関係を歴史的、関係論的に論じる必要性を強調している¹²⁾。それにより、文化論における「アメリカ化 (Americanisation)」を論じた場合に陥りがちな、「粗野な」経済還元論、文化帝国主義論あるいはエリート主義という結論を避けることができるのである。マグワイアは、特に、文化の純粹主義を退け、その異種混合性を強調する。それは「アメリカ文化」の等質的、均質的な影響を誇張することが、「新しいアイデンティティ」の出現を見落とすことになるからであるとするのである¹³⁾。

マグワイアは、アイデンティティの多層性と「文化の環流過程」を強調する。そこにおいてスポーツの普及過程は、次のように捉えられる。すなわち、この過程は、「西欧、非西欧の『機

能的民主化』(エリアス)の過程のなかにあり、その受容は一方的なものではなく、固有の文脈に即した抵抗、再解釈と環流の過程としてあらわれる。従って、近代スポーツの普及過程で、その西欧的形態やモデルが、抵抗なしに受け取られたと見えても、それは固有の文脈に基づいて再解釈され、維持促進されたのであり、西欧的形態のスポーツがそのまま受容されたわけではなく、また非西欧社会に固有の身体文化も消え去ったわけではない」のであり、そのような西欧的形態が、この普及過程のなかの相互作用のなかでどのような変容を被っていったかが重要になる¹⁴⁾。この「機能的民主化」とは、相互依存関係の増大による支配 = 被支配の関係構造の変化において、支配層といえども非支配層との相互依存関係が強化されていく過程において生じる。そこにおいて、肉体的脅威・暴力による一元的な支配が不可能になり、自らの超自我をモデル化することによって、被支配層や植民地の人々を自らの編みあわせに引き込んで支配せざるをえなくなる。その過程は、よりいっそうお互いを緊密な相互依存の網の目を形成するのである。そのような相互依存関係と機能連関の増大が、「支配層であっても他者と独立に意志決定を行う可能性は縮小し、社会的結合の全領域にわたって権力格差の縮小、権力比重の配分が平等化していく傾向」として生み出されていくのである¹⁵⁾。

エリアスは、『宮廷社会』や『文明化の過程』においてこの過程を明らかにした。すなわち、相互依存の網の目のいっそうの広がり、緊密化は、長期的な視野と他者への配慮を不可欠のものとしていく。自己抑制という内面化ははじめは宮廷社会においてモデル化され、さらに市民社会の台頭に従って徐々に社会全体に浸透していく。しかし、そのような行動様式は、「・・・単に上から下へ伝達されただけではない。社会の重心が移動するのに対応して、下から上へも伝達」されるのである¹⁶⁾。「・・・もしも、空

間像に固執すれば、時には下から上へすら浸透し融合して、新しい独自の統一体、文明化された行動様式の変種（Spielart）となる。文明化が拡大するとともに、その都度上流にいるグループとその都度下流にいるグループの間の行動の対照の幅は縮小し、文明化された行動様式の変種やニュアンスは増大する」（傍点はエリアス）¹⁷⁾。このような圧力、メカニズムが、「対照の幅の縮小と変種の増大」として、相互の文化の変容、社会的ハビトゥスの変容を促すのである。

マグワイアは、近代スポーツは、はじめに人々の具体的なアイデンティティにインパクトを与えるが、次にはそのようなアイデンティティは、より広い「ローカル」あるいはナショナルな文化プロセスに埋め込まれ、再解釈されるのである¹⁸⁾。そこに新しい文化の可能性がみいだされるといえる。

3．スポーツのグローバリゼーション過程

山下は、しかし、このようなマグワイアの描くグローバリゼーション像を、包括的にスポーツを論じたものとして評価する一方で、そのエリアス理解と現在進行するグローバリゼーションのとらえ方について、いくつかの批判を加えている。主な指摘は、マグワイアが、スポーツの文化帝国主義的な把握を批判しつつも、自身が地政学的な陥穽におちいつているとする点である¹⁹⁾。「西洋 - 非西洋」といった場合、それは様々なレベルに結合しているとする。例えば、とりわけ非西洋文化といった場合、国民国家の形成以降、それは「西洋」との交渉のなかでつくられた「非西洋」であることが多く「そこで形成された文化はすでに国際関係を前提し、同時にそれを含み込んで差異的に創造されている」のであるとする²⁰⁾。マグワイアは「地理的文化圏」と「政治経済的中心」を混合してしまっているのである。さらに、そのために、

スポーツの普及過程を「「西洋 - 非西洋」の環流、相互依存と捉えたにもかかわらず、それが「地政学的なヘゲモニーの移動」となってしまうとするのである²¹⁾。すなわち、エリアスは、イギリスにおいて生じたスポーツという余暇形態が世界的に普及していく過程を「スポーツ化」という言葉であらわすのであるが、これはイギリスの世界におけるヘゲモニーの獲得に伴う植民地化、いわゆる「文化帝国主義」を意味するのではなく、イングランドの貴族の差異表徴であったフェアプレーやアマチュアエートスが衰退していく過程であり、抽象化された世界的普遍へ向かう過程として捉えられる²²⁾。その意味で、スポーツは近代の産物として抽象化し、普遍化していくものであったといえる。例えば、「レコード」（数字という意味でも記録という意味でも）が意味することは、抽象的な他者との（過去、現在、未来を限定としない）競争を可能にする²³⁾。スポーツは、「人々の時空を超えた相互結合を常に意識化」する場であるといえる²⁴⁾。スポーツは、潜在的にコスモポリタニズムへと結びつく普遍的な性質を持っているのである²⁵⁾

しかし、山下は、現在のグローバルなスポーツシステムの編成のなかで、スポーツが持つ「『脱埋め込み』されたコードの共有を通してコスモポリタニズムへ向かう可能性」が「逆説的に」失われているとする²⁶⁾。たとえば、ナイキ、アディダスといったスポーツ関連企業、あるいはスカイ・スポーツなどのグローバル・メディアにみられるように、「スポーツのグローバル・システムは、トランスナショナルな企業、メディア、スポーツ組織、スポーツ大会と結びつき、グローバルな水準で世界スポーツを支配する中心となるのである」とする²⁷⁾。そこにおける支配の形態は、地理的、空間的な拠点から発せられる権力、支配構造というものではなく、脱中心化、ボーダレスな権力であり、自在にそのネットワークを広げる。その権力のあり方は、

より偏在的になり、よりいっそう「抽象的な世界システムが形成されるのである」²⁸⁾。「グローバル」= 地球規模を意味するならば、それは「グローバル」さえも超出していくといえる²⁹⁾。

そのようななかでは、機能的民主化の過程における「対照の幅の縮小と変種の増大」により新しいアイデンティティの生成が捉えられるとしても、それはあくまでもそのグローバル戦略の枠内において産出される「変種」ということになる。それは、人々の意味構築の抽象的領域としての生活世界が、いっそうシステム化していく過程であるといえる³⁰⁾。

おわりに - 課題と可能性

山下は、マグワイアの「欠陥」のひとつを、エリアスが示す「サバイバルユニット」という人間の生命の維持に必要な集団の単位が「人類」という単位へ、すなわち類的認識へとむかうコスモポリタニズムへとつながるより大きな枠組みを汲み取れていないことにあとする。そのために、グローバル化するスポーツの様態を地政学的な水準へと還元してしまい、マグワイアはスポーツのグローバリゼーション過程において形成される「抽象的な世界システムの生成過程」を意味づけることができなくなっているのである³¹⁾。エリアスは確かに「西洋」といった言葉を使用するが、それはサバイバルユニットという「統合単位の高次化」とそれらの依存関係の重層化、多様な編成のなかで生じる「対照の幅の縮小と変種の増大」の過程、そこにおける文化の「脱埋め込み」と人々の類的認識にむかう過程において捉えることが必要である。

サバイバルユニットは、単に量的な集団として捉えるのではない。エリアスはたとえば家族、部族、国家などを例としてあげているが、より複雑化した社会においては、相互依存と結合の連鎖は単層ではなく重層的なものとなってい

る。相互依存の網の目が拡大し、その編みあわせが複雑化することによって、人々の集団の準拠枠は「人類」という枠組みへと向かうとするのである。エリアスにとって「文明化の過程」とは、この「人類」という一つのより高次サバイバルユニットへ向かう過程である。しかし、それは単に統一的、一次元的なまとまりとしての共同体ができるということの意味しているわけではない。エリアスは、そこにおいて人々のアイデンティティは、そのサバイバルユニットの複雑性、多層性に意味づけられているとする³²⁾。すなわち、「個々の人間が集団の体質(ハビトゥス)を身につけており、その人間が成長の過程で多かれ少なかれ個性化するのはその社会的体質にほかならない・・・社会的体質は・・・より複雑な社会では、重層的である。たとえば、一口にヨーロッパ人といっても、リパブル=イギリス人の、あるいはシュバルツヴァルト=ドイツ人の特徴を身につけているかもしれない。その人間が暮らす社会の相互に入り組んだ統合レベルの数による。それらのなかで通常、ある特定の層が特に重要な位置を占める。それは、例えば、部族とか国家など、特定の社会的なサバイバル・グループへその人間が所属していることを特徴づける層である」とする³³⁾。より高次のサバイバルユニットに意味づけられる一方で、それぞれの生活に結びついた、様々なユニットも保持していることになる。そのような位相のもとで、現代社会における「われ=われわれ」アイデンティティは、よりいっそう重層化しているのであり、様々なレベルで統合されている。そのようなアイデンティティのあり方が、グローバリゼーション過程において、よりいっそう「われ=われわれ」あるいは「かれら」といったアイデンティティの流動化を促しているのである。

エリアスは次のように述べる。すなわち、そのような「世界的段階での人類の統合へ向かう動きは、確かにまだ初期段階にある」とはいえ、

「全世界に及ぶ新しい倫理性の初期形式、とくに人間と人間の同一化のいっそうの広がり、すでに明確に認めることができる。個人が所属する国家と部族に、つまりその個人の集団アイデンティティに関係なく、困窮にある個人の運命に全世界が新たな責任感を抱くという発展を示す兆候は多く見られる」とする³⁴⁾。J. トムリンソン (Tomlinson) は、「社会的相互関係のなかで恒常的にアイデンティティを『構築』していこうとする人間」にとって、他者(抽象的にも具体的に)との関係に対する再帰的な意識を高めることが必要不可欠なものとなっているとする。そのため、コスモポリタニズムの可能性は、「ローカリズムの鉄壁の論理によって排除されるのではなく、遠くの他者を象徴的な意味で『重要な他者』として意識するために、相互関係に関わる領域を拡大することを目指した文化的プロジェクトの中に収斂していく」とするのである³⁵⁾。とりわけ、トムリンソンは、システム化していくグローバリゼーションの諸力に対する「人間をそれぞれの場所につなぎとめる肉体的要素と政治的・経済的必要という物質的な条件」の重要性をあげている³⁶⁾。その意味で「そこでの対面的経験や、人々を場につなぎ止める身体性は、グローバルな経験を生活世界の中での実践感覚から再解釈する契機」を持っており、近年のサッカーサポーターを中心とした諸活動はそのような可能性の例であるといえる³⁷⁾。

エリアスをグローバリゼーションとの関わりで論じる研究は端緒についたばかりである。R. ロバートソン (Robertson) によるが指摘するまでもなく、エリアスは「グローバリゼーション」について明示的に語っているわけではない³⁸⁾。そのため、そこには多くの課題が残されている。A. リンクレーター (Linklater) も指摘するように、エリアスは国内政治、あるいは国際関係論の専門家の議論について検討していない³⁹⁾。それは、エリアスがいう「社会学

者の距離化」によるものだとしても、指摘されるように、エリアス学派の研究からは現代的な権力のバランスとその変化はみえても、スポーツがグローバル化することの意味は捉えられないのである⁴⁰⁾。すなわち、文化の均一化への圧力がどのように人々のスポーツに関わる経験を構成し、あるいは自ら構成するのか、そこにおける問題点と可能性はどのようなものであるかという点であろう⁴¹⁾。

他方で、エリアス自身のコスモポリタニズムにも課題は残っている。最も重要な点は、ナチズムとの関係であろう。たとえば、エリアスは『ドイツ人論』において、ヒトラーが、それ以前の階級にまつわるエートスを取り払い、「ゲルマン人」というより大きなカテゴリーを提示しえたことが、多くの人々をナチスの政策に動員する一つの条件となったと分析している⁴²⁾。エリアスがそれらを「普遍化」の一つの断面として捉えているとすると、「文明化の挫折」というよりも、それに内在するある種の必然的過程と考えられてしまう⁴³⁾。そのため、エリアスが近代合理性とどのように対峙したのかという問題は、さらに検討する必要がある。

しかし、エリアスを「暴力論」「文明化論」といった従来のとらえ方から引き上げ、そのコスモポリタニズムにつながる思想を現在のグローバリゼーションに交差させることにより、「文明の衝突」にみられるような、「どの文明が最も正しいか」という価値論的な議論に巻き込まれることを避け、人々の複合的な連結を促すグローバルな連帯の可能性について考える手がかりが与えられると思われるのである。

(註)

1) 『ノルベルト・エリアスと21世紀』には詳細な文献目録および関連論文目録が作成されている。また、インターネットに関しては、下記参照。

2) スポーツの領域では下記のような研究がみられる。岡田猛「N・エリアスにおける課題と指定の

スポーツ』『体育・スポーツ社会学研究』第8巻、1989年。池井望「フィギュレーション社会学と近代スポーツ - N. エリアス論 - 」日本スポーツ社会学会編『スポーツ社会学研究』第3巻、1995年。菊幸一「エリアス派スポーツ社会学と身体 / Body」日本スポーツ社会学会編『スポーツ社会学研究』第5巻、法政大学出版局、1997年。亀山佳明「スポーツの現代化と身体性の社会学」『岩波講座社会学 第4巻 身体と間身体社会学』1996年。多木浩二『スポーツを考える - 身体・資本・ナショナリズム』ちくま新書、1995年など。

3) イギリスにおいてそれ以前の「スポーツ社会学」は、「身体教育」の分野において捉えられてきた。Dunning, E. (ed), *The Sociology of Sport*, Frank Cass and CO.LTD., 1971, エリアスによる序言など参照)

4) 『文明化の過程』が英語圏で出版された当時の批評については、Featherstone, M., Norbert Elias and Figural Sociology: Some Prefatory Remarks, *Theory, Culture & Society*, vol. 4, No. 2-3, 1987.

5) 『スポーツと文明化』、130頁。

6) 拙稿「ノルベルト・エリアスにおけるスポーツ」京都体育学会編『京都体育学研究』第14巻、1999年参照。

7) 『スポーツと文明化』、239頁。

8) 『スポーツと文明化』、185頁。

9) 『スポーツと文明化』、217頁、31頁。

10) Maguire, J., *Global Sport: Identities, Societies, Civilizations*, Cambridge: Polity Press, 1999.

11) Maguire, J., American Football, British Society and Global Sport Development, *The Sports Process*, E. Dunning (eds.), Human Kinetics Publishers, 1993.

12) Maguire (1993), p.223.

13) *ibid*, p.226.

14) 「グローバリゼーションの像 グローバリゼーションとスポーツ」山下高行『スポーツ』有賀郁敏他著、ミネルヴァ書房、2002年。374-5頁。

15) 同上書、370頁。

16) 『文明化、下』、463頁。

17) 『文明化、下』、369頁。

18) 次も参照、A. グートマン、『スポーツと帝国主義』昭和堂、1997年。

19) 山下前掲書、379頁。

20) 同上書。アメフトの例では、イギリスとアメリカとどちらが西洋で非西洋なのか、という問いが喚起される。

21) 同上書。

22) 同上書、380頁。

23) Hopf, W., *Soziale Zeit und Körperkultur*, Lit,

1981. また、A. グートマン『スポーツと現代アメリカ』TBSブリタニカ、1981年。

24) 山下前掲書、382頁。トムリンソンは、ギデنزのモダニティ論にならい、近代性における人々の大規模な「移動(ディスペースメント)」は、場所的移動だけではなく、「場所が『幻灯的』になり、そこに遠く離れた影響力が浸透していくプロセス」が、日常生活とグローバリゼーションの重要な側面であるとしている。J. トムリンソン『グローバリゼーション文化帝国主義を超えて』青土社、2000年、108頁。

25) 他方で、B. ホウリハンは、オリンピック等の国際大会は、いままって現代社会においてナショナリズムを明示できる数少ない場所の一つであると述べている。B. ホウリハン、『運動文化研究』2004年、7月号。

26) 山下前掲書、383頁。

27) 同上書、380頁。

28) 同上書、391頁。

29) しかし他方で、このグローバル戦略は、現時点でも国家による帝国主義的戦略を必要とする。渡辺治・後藤道夫編『「新しい戦争」の時代と日本』大月書店、2003年。またグローバリゼーションにおける「場所の喪失」およびその「再構成」という問題意識については、伊豫谷登士翁・成田龍一編『山之内靖対談集 再魔術化する世界 総力戦・帝国・グローバリゼーション』お茶の水書房、2004年。

30) トムリンソン前掲書、56頁。

31) 山下前掲書。

32) ここでエリアスはアイデンティティという用語を、「自己の一貫性」と捉える心理学的用法とは異なる意味で用いている。「われわれ=アイデンティティを欠いた、われ=アイデンティティは存在しない。われ=われわれの比重のみが、つまりわれ=われわれの関係のみが変化しうる」『諸個人』209頁。エリアスは人間のパーソナリティ構造を、社会構造との関連とそのバランスにおいて捉えている。例えば「個性」あるいは「国民性」としてあらわれるのはその「社会的ハビトゥス」の一側面であるとする。

33) 『諸個人』、205頁。

34) 「人権の倫理性を今日、狭い国家的目的に使う者に対して、それは明日、反抗しうるのである」『諸個人』、189頁。そのようなグローバルな連帯の活動は近年活発になっている。とりわけ1999年WTOシアトル会議に結集した世界各国のNGOの活動は、それぞれの団体のイシューを超えて「ネオリベラルなグローバリゼーションに対する抗議行動」であり、そのような活動の端緒とされている。稲葉奈々子「越境する社会運動 - ケ

ベックにおける都市底辺層の社会運動」『寄せ場』No.14、2001年。

35) トムリンソン前掲書、353、356頁。

36) 同上書、60頁。および、259頁に「我々はみな、人間として、肉体を与えられ、物理的に位置づけられているという、単純ではあるが重要な事実がある。この基本的な物質的な意味において、文化と場所との結びつきを完全に切り離すことは不可能であり、ローカル性は、あいかわらず、我々が生活を送るための物理的な場所としての権利を、我々に対して要求し続けるのである」

37) 山下高行「2002FIFAワールドカップとサッカーサポーター活動」『日本の科学者』Vol. 37、No. 7、2002年。また、T. Yamashita/ N. Saka, Another Kick Off; World Cup 2002 and Soccer Voluntary Groups as a New Social Movement, *Japan, Korea and the 2002 World Cup*, J. Horne/ W. Manzenreiter [eds.], Routledge, 2002. 拙稿「スポーツと新しい社会運動の可能性 - 新潟Alliance2002を例に」『一橋大学スポーツ科学研究室年報』2003年等参照。

有賀は、アソシエーション論の観点から、そのような「新しい社会運動」を評価する一方、そのような「アソシエーション」が必ずしも、支配的システムに対する対抗ヘゲモニーを構築し、社会変革のイニシアティブを発揮するとは限らないとする。すなわち、「運動の理念が反転し、既存システムの価値を市民社会に浸透させながら市民社会を逆にコントロールするといった、システムとの親和性もしくは癒着関係がそこから生じる可能性」もあり得ることを指摘している。有賀郁敏「アソシエーションの歴史と現代の公共圏」『方法としての文化と人間』佐藤嘉一（編著）ミネルヴァ書房、2004年。

38) R.ロバートソン『グローバリゼーション 地球文化の社会理論』阿部美哉訳、東京大学出版会、1997年。同様に、Mennell, S., *Globalization of Human Society, Global Culture: Nationalism, globalization and modernity*, M. Featherstone(ed), SAGE, 1999.

39) Linklater, A. Norbert Elias, The 'Civilizing Process' and the Sociology of International Relations, *Sociology of International Relations*, 2004, 41, p.23

40) 山下前掲書、381頁。

41) 同上書、382頁。

42) 「だが彼らは（＊エリート将校たち）は野生化しながらもその態度や心情には、決闘を許された昔の貴族・ブルジョア社会の伝統、エリートたる将校の伝統が残っていた。ヒトラーはその伝統から解放され、将校や学生の運動に残っていたエリート特有の障壁を打ち抜き、大衆に広がること

を妨げるエリート的な限界を超えて、その運動を国民全体の運動に変えた。貴族的、ブルジョア的な上流階級の一人であることや、若者なら将校団や学生団体の一員であることよりも、ゲルマン人種の一人であることのほうが、はるかに多くの人々を参加させることができたのである」『ドイツ人論』、234頁。

43) 佐伯啓思「エリアス - 近代主義への懐疑」『ノルベルト・エリアスと21世紀』

【Web】

Elias Foundation

<http://www.norberteliasfoundation.nl/>

HyperElias@WorldCatalogue <http://www.kuwi.uni-linz.ac.at/hyperelias/z-elias/>

Schiller-Nationalmuseum/ Deutsches Literaturarchiv <http://www.dla-marbach.de/>